

大空襲の犠牲者供養の記事を読ん

岸 哲子

記事の内容は、一九四五年八月から九月に
かけて氷見市の島尾に一一体の遺体が流れ着
き、今年の八月一二日にこの人たすを供養す
る慰霊祭が行われたというものです。テレビ
などで報道され、戦後七〇年にあたって平
和を願うというこゝも身近に感じられる記事
でした。

戦争は自分が生まれる前のことであ
り、戦争があつたこと、その中でたくし
の犠牲者が出たこと、辛い思いをした人がいた
こと、という事実はいつまでも変わりません。だ
から、自分たすはそれを知らず必要があると思
ひます。未来を担う世代として。

毎年八月一日には、北日本新聞主催の花火
大会が開催され、八月一日は、富山大空
襲があつた日、それにより亡くなつた人々
を、花火の音で空襲の日を
こゝを思い出す人もいます。聞きま
した。僕は

このころを聞いて初めは、花火で空襲の日を
 思い出してしまおうの気は、見たりはいい
 のに、思っでいました。今、考えは違いま
 す。僕は今年花火を見たときに、空襲の日を
 思い出さ人がいる。ということも改めて考え
 直しました。そこで僕は思っ、たことありま
 す。花火がき、かけ、た、毎年、空襲があ
 ったことを思い出し、大勢で花火を見なが
 ら、たが一つ平和を願うことができればいいと
 いうことびす。僕は、これから毎年花火を見
 子時に、一緒に見て、いる家族や友達とも、う
 い、た考えも共有しようと思えます。
 記事にもあるように、戦年の犠牲者のやいを
 若い世代に伝えることは、やはり自分たちが
 大人になり、更に伝える立場にな。たとき、に
 自分たちの中に、戦年に対する深い理解があ
 り、ために非常に重要びす。平和の大切さは本
 当に戦争を経験しな、いと実感びす。ないか、もし
 れ、ま、せ、ん、が、自分なりに平和とは、どうい
 能、な、の、か、平和を守り、ために自分、今、び、す

こころは何なのかよく考えました。こころはできません。
僕は、平和とは誰かが不当な扱いを受けた
り虐げられたりすることのない世界かと思ひ
ます。辛いことや挫折、人生の上で、試練と呼
ばれ、こころは必ず誰かが経験するはかばか
です。そのとき、それびれが自身の支えにならな
い
と持、こころの世界が平和な世界か。僕は考
え
ます。そして、今の時代に生きていくための
人、戦争と平和に対する自分の考えを持、
こころしいびあ。